ミウッチャにとってのレースは、「嫌いにもかかわらず、素敵」という
逆説の美を追求する試みだった

ブラウス¥133,350(プラダ／プラダ ジャパン)

中野香織の Luxury Quest 贅沢の本質

［ラグジュアリー・クエスト］

Photos : HIROSHI TAKASE
Text : KAORI NAKANO

vol.11

Paradox

モードの格を上げるのは、“にもかかわらず”という逆説

完璧で、誰が見ても美しいレースは
その美しさゆえに
先鋭モードにはなりえない

贅沢の一形式でもあるようなモードは、常に新しい美を追求する。

だが、文句のつけようもなくきれいなものは、必ずしもモードにはならない。

完璧で艶やかなロングヘアは、万人にわかりやすい永遠の女性美の記号ではあるけれど、モードの論理においては、しばしば「場外」である。美人ヘアでセクシーに見せる無難よりも、理解しがたいぼさぼさの短髪「にもかからわず」ゴージャスな魅力を醸し出すことのほうが、「モード格」は上、というわけである。つんつんヘアで驚かせたかと思えばワカメちゃんヘアに挑んだりするアギネス・ディーンは、まさにそんな論理にかなってモード格を上げていった。「××にもかかわらず、格好いい」。そんな逆説をしのばせることが、モードにとってきわめて重要と見える。

だから、「誰が見ても美しい」レースにしても、まさにそのコンサバな理由ゆえに、先鋭化するモードとはあまり相いれないはずだった。

ところが、今秋シーズンの最大の話題をさらっているのは、レースである。

しかも、源流は、あのプラダ。スーツからドレスからバッグに至るまで、レース、レース、レース…。よりによって、ナイロンバッグにラグジュアリーな価値を与えた「革命家」ミウッチャ・プラダが、レース尽くしのコレクションを見せるとは。いったいなぜ？

「レースが嫌いだから。レース嫌いを克服できるかどうか、試してみたかった」（8月30日付『タイムズ』紙）

「嫌いにもかかわらず、素敵」
という逆説の美を追求した
プラダの試み

やはり、ミウッチャにとっての今シーズンのレースは、「嫌いにもかかわらず、素敵」というパラドキシカルな美を追求する試みだったのである。

秋冬のレースに見え隠れするのは、そんな逆説である。「やっぱり、女の子はカワイイものに帰ってくるのよね」という単純な気分でレースに手を出せば、「花嫁さん」「お嬢ちゃんの晴れ着」の印象を免れないだろう。では、どう着るべきか。

模範例となるのは、総レースのドレスでクールに現れたシャリーズ・セロン、レースの巨大バッグをカジュアルに抱えたエヴァ・メンデスあたりか。甘く上品なはずのレース「にもかかわらず」クールでカジュアル、という演出が今年らしさのカギを握る。

ミウッチャがもたらした新世代レースへの熱狂は、18世紀に刺繍とレースで栄えた山あいの町、スイスのザンクト・ガレンの復興をもたらしている。今、レースを着るということは、廃れつつあった伝統工芸を復活させるパトロンになる、ということでもあるようだ。

気まぐれな贅沢に見える装飾を復活させることで、伝統工芸を守り、町の復興を促すことができる。モードにも倫理や人道的配慮が問われるなか、ミウッチャは、モードにそんな社会貢献をする力があることをもタイミングよく示してみせた。

なかの・かおり●エッセイスト・服飾史家。1962年生まれ。東京大学文学部および教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。イギリスのケンブリッジ大学客員研究員などを経て文筆業に。連載記事は日本経済新聞、朝日新聞ほか多数。近著は『着るものがない!』『モードの方程式』（共に新潮社刊）など。2008年4月より明治大学特任教授に就任